

垂水日向遺跡第42次・第43次発掘調査 現地説明会資料

2023.7.22(土) 神戸市文化スポーツ局文化財課

たるみひゅうがいせき
垂水日向遺跡は、神戸市垂水区の福田川河口部に立地する遺跡です。これまでに40回を超える発掘調査が実施されて、平安時代から鎌倉時代の遺構や遺物、約7,300年前の鬼界アカホヤ火山灰堆積層、縄文人の足跡などが確認されています。

今回の発掘調査は、垂水中央東地区再開発事業に伴うもので、2023年1月から約3,300㎡の調査を実施しています。

垂水は、奈良時代に東大寺の荘園となり、「垂水荘」と呼ばれるようになったと古文書に書かれています。

今回の調査では、垂水に荘園があった頃の遺構や遺物が確認されました。



調査地上空から淡路島方向を望む



調査地位置図



1



2

方形に区画する溝

溝は幅約3～4.5m、深さ約1mで、堀と言ってもいいような規模です。A区の北端では東西方向に（写真1）、B区中央では南北に（写真2）の延びます。今回の調査地南に隣接する過去の調査では、同様な規模・時期の東西方向の溝が確認されています。それらと合わせると、南北60mほどの方形の区画になると考えられます。



3



4

掘立柱建物

溝で区画された中に集中して存在します。詳細な検討は今後になりますが、現時点で10棟以上が確認されています。柱穴から出土している遺物は、11世紀後半から12世紀後半ごろの時期と思われます。

柱穴には、柱材の根元が残っていたり、底に石を詰めているものもありました。



5

落ち込み

A区の中央で東西方向の落ち込みを検出しました。深さ60cmほどで、東に向かって深く広がります。ここからも多くの土器と硯が出土しました。

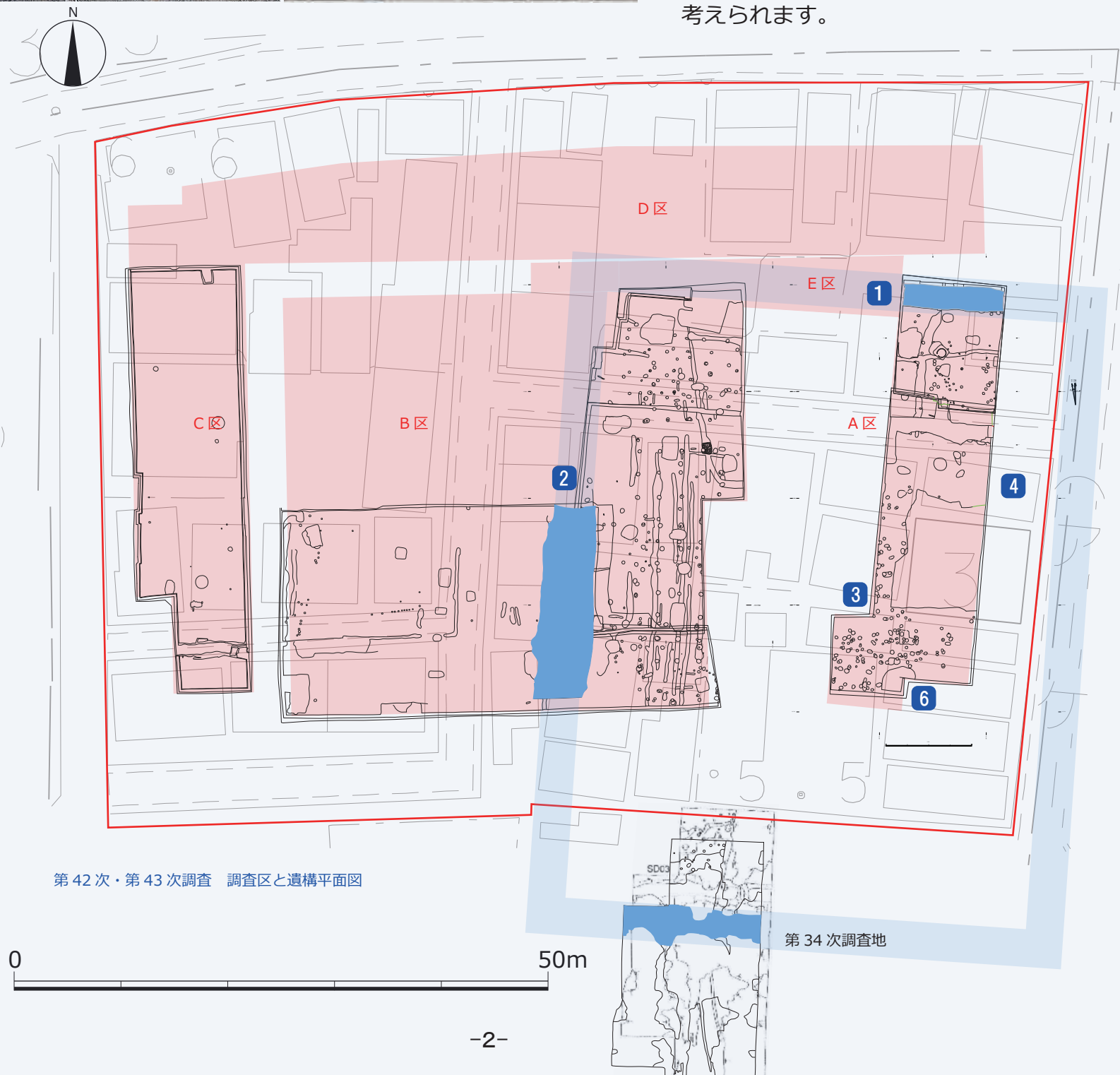
井戸

調査区の南端で検出されました。半分以上が調査区外のため全体像は不明ですが、掘形の規模は直径約3mと推定されます。井戸側は約1mの方形で、縦板を3枚セットで組み、横棧で固定していました。

板材は加工の跡がはっきりとわかります。



6



第42次・第43次調査 調査区と遺構平面図

第34次調査地



7

8

9

10

遺物 須恵器や瓦器の椀、土師器の皿のほかに、白磁や青磁の椀、木製品などがあります。

瓦はごくわずかですが、巴文軒丸瓦（写真8）や平瓦が出土しています。

裏面に線刻文字のある石硯（写真9）は、「舍利弗」と書かれていることから、仏教に造詣がある人物がいたことを思わせます。

また、須恵器鉢の外面に文字が書かれた墨書土器（写真10）が出土しています。

7～10：溝や落ち込みから出土した土器や瓦、硯など

今回の発掘調査では、平安時代から鎌倉時代にあたる溝で囲まれた建物跡や井戸などを検出しました。建物の構造については検討中ですが、建て替えを含めて10棟以上あったと考えられます。

今回検出した掘立柱建物群は、調査地の北側や北東側で行われてきたこれまでの発掘調査で確認されている掘立柱建物群と同時期にあたる可能性があります。

垂水荘は12世紀中頃まで東大寺が所有する荘園（私有地）でした。その後は、国衙領（播磨国の公領地）になりますが、溝で方形に区画された建物群は、荘園あるいは国衙領の管理・経営に当たった在地領主の居宅に関連する施設にあたる可能性があります。

これらの遺構は、中世垂水の景観を復元するうえで、大変貴重な資料となります。

現地説明会開催にあたって垂水中央東地区市街地再開発組合からご協力いただきました